

◆研修会特集◆

機関リポジトリで何をしたいのか

前田 信治

抄録:機関リポジトリの意義は、大きく、電子的資料の保存・公開、機関の対社会説明責任、灰色文献の利用促進、機関のショーケース・広報手段、学術情報の Open Access 化のためのツール、に分類される。それぞれ機関の事情に応じて意義を選択すべきだが、学術情報の Open Access 化のためのツールと看做すとき、機関リポジトリは継続的で大きな課題を図書館に与え、それによって図書館員に目指すべき目標を示す。

Key Words : 機関リポジトリ、学術情報流通、Open Access、Big Deal、セルフ・アーカイブ

I. はじめに

2008年4月以降、私の日々の図書館の業務は常に機関リポジトリが中心であり、毎日これに関する何かについての仕事を担当してきた。機関リポジトリで何をしたいのか。このタイトルで本年7月16日の第18回日赤図書室協議会研修会でお話した。あらためてそれを整理してみようと思う。

1. 出版社主導の学術情報の流通を研究者の手に取り戻したい
2. 図書館員に元気になってもらいたい

一番大きな枠で括ると、つまるところ私の主張はこの二つにまとめてしまうことができる。あれこれ今まで喋って来たが、実に単純

なことしか言っていない。この文章では同研修会で述べたことを繰り返しながらまとめ、同時に機関リポジトリとその事業のもつ意味について、大学等研究機関の図書館員が果たすべき役割についての自分の意見を記しておきたい。

II. 2つの主張

1. 出版社主導の学術情報の流通を研究者の手に取り戻したい

機関リポジトリ事業の意義は、研修会でも言及したように様々な点から捉えることができる。

(1) 電子的資料の保存・公開

従来図書館は、紙媒体の資料はパンフレット一枚といえども収集対象としてきた。しかし金銭的・労力的コスト削減などの理由から冊子刊行できなかつた、或いは研究ノートの草したデジタルのままの学術資料は、そのための手段が確立されていなかったこともあ

MAEDA Shinji
大阪大学附属図書館学術情報整備室
maeda@library.osaka-u.ac.jp

り全くといっていいほど保存の対象ではなく、従って公開の対象でもなかった。機関リポジトリはこれらの受け皿となり得、且つそれを比較的低いコストでサービスの維持が可能である。本学でも文科系の教員が「図書として出版するほどでもないのだが、私の著作の公開手段として機関リポジトリを使わせてもらえないだろうか」という問い合わせがあった。出版となると経費もかなり必要で大がかりになりがちであるが、経費が少なくて済み且つ大学としての公式のサービスということで信頼性もある機関リポジトリの果たす役割として相応しいものである。機関リポジトリの長所のひとつであると言えよう。

(2) 機関の対社会説明責任

国公立大学は勿論、私立大学でも私立大学等経常費補助金等、所謂私学助成金などの公的資金は入っている。よってそこで生まれた学術成果を無料でアクセスできるようにして社会に還元するのは、そうすればより望ましいといった次元なのではなく、それは「義務」であるという観点である。それは機関リポジトリに拠る公開であるべき必要は必ずしもないが、学術成果の公開を本来の目的とした機関リポジトリのサーバソフトウェアを用いるのが最適であろうと思われる。

(3) 灰色文献の利用促進

例えば博士学位論文は、完成しそれによって著者に博士学位が授与されると、その大学院の図書館と国立国会図書館に冊子が一部ずつ保存される。しかし利用のためにはそこまで足を運ばねばならず且つ全文の複写には著者の許諾が必要など、閲覧者にとって自由な利用とは言い難い面もある。また紀要論文は冊子刊行とともに全国の同種の研究をしている研究室に送付されたりするが、これも発

行自体が限られた部数であり、この紀要に発表されている論文が十分に学術情報の流通にのっているとは到底言えない。これらを発行機関の図書館で著作権処理をした後機関リポジトリに掲載することは、間違いなくその利用の機会を飛躍的に高める効果がある。

(4) 機関のショーケース・広報手段

少子化によって大学間の競争の激化が増し、学生数の確保は地方大学、中小規模大学にとっては文字通り死活問題である。大学に限らず社会に対して自機関の活動をアピールをしなければならない事情は殆ど全ての研究・教育機関にとって必須の要件であろう。機関リポジトリには、社会に対して Tax Payer Free Access の責任を果たす上記(2)の観点のみならず、自機関の存在意義をより明確な形態で社会に訴えたいという欲求に応じる機能が備わっている。山の上に大学がある。しかし麓の町の住民には朝と夕方に学生が通学するだけしかこれといって何も「違い」はない。山の上で何が話され何が議論されているかは全く知らない。そういう状況でその組織が存在していることに疑問がある。それでよいのか。社会に対してもっと自己の存在を主張する広報ツールとして機関リポジトリを見るのがこの観点である。

(5) 学術情報の Open Access 化のためのツール

海外の学術雑誌の価格高騰が世界の大学図書館の目に映り始めてからもう久しい。Elsevier 社、Wiley 社、Springer 社の所謂 Big Deal といわれるパッケージ商品は個々の論文を入手する単価としては間違いなく一番低いものであろう。しかし巨額の経費が必要であり毎年の値上がりに応じる余裕は各大学には既がない。そしてその値上りを防ぐ

決定的な手段はなく、世界の科学の発展の原動力である学術情報の流通は今や完全に営利企業である大手学術出版社が主導している状況である。購読者である大学等研究機関はそれに従うしか、研究を進めるために必要な学術資源を入手する術はない。機関リポジトリへの研究者のセルフ・アーカイブにより、出版社主導の学術コミュニケーションとは別の流通を作る、という目標をもつのがこの観点である。学術雑誌には通常査読方式がとられ、そこで審査されることによって一定の水準が維持され、このことが信頼されるジャーナルとして健全で軽々しく動揺しない頼もしいブランドを作り上げる。何十年にもわたって自分の地位を確立してきた各分野のコア・ジャーナルのタイトルは権威と責任感に満ちている。しかしながら、その分野の学問がより発展し人類の福祉により大きく寄与すること、それがこれらのジャーナルの使命であった筈であるのにそれは今や際限なく価格が上昇し、真実に悲しいことであるが、現在はもう有効な学術コミュニケーションのツールではなくなっている。そこでこれとは別に、購読者利用者であり本来それらの学術情報の生産者でもある大学等研究機関の主導する学術情報流通のプラットフォームを作らねばならない、とする目的を掲げるこの動機は、機関リポジトリの意義の中でも最も鋭く攻撃的な性格をもつものである。

上記5つの機関リポジトリの意義のうちいずれに自機関の機関リポジトリの使命を見出すかはその機関が理事会など組織全体のレベルで公式に決定すればよいことである。私が勤務している大阪大学においても、大学としての機関リポジトリの位置付けは、上記の「(2) 機関の対社会説明責任」である。が、

それが即ち機関リポジトリが私を惹く理由になっている訳ではなく、それはどこまでも(5)学術情報のOpen Access化のためのツールである。機関リポジトリを学術情報のOpen Access化のためのツールとして捉え、そのために活用しようとするとき、機関リポジトリは最も遠大なテーマを背負い図書館員は長く続く課題を与えられることになる。これは即ち以下に述べる、図書館員に追及するに足る目的を与えることにそのまま繋がる。

2. 図書館員に元気になってもらいたい

こちらは私自身が機関リポジトリの担当になって以来絶え間なくずっと直接に経験してきたことである。誰でも容易に思いが至ると思うが、何もこれは機関リポジトリの業務に限ったことではない。参考調査の業務や学生の図書館及びそこで提供する資源の利用指導、またラーニング・コモンズの意義においてよく語られるような、「場としての図書館」の利活用など、全て図書館の単なる「事務」の域に止まるものではなく、図書館員はそれら各々の分野における既に構築された手法に通じ、他の機関における多くの事例を評価し、且つ自分の機関の図書館の特殊性を考慮し、その上で自分なりの見識をもってその事業に当たらねばならない。そこには必ずその場その場での合理性に止まらない、図書館職員としての専門性が求められる。従って、これらいずれの分野においても図書館員は大いに自己の力量を試し築いてきた力を発揮できる機会に遭遇する。これは即ち図書館員を元気にする所以である。これに対して機関リポジトリの構築・運営は、決して図書館員のアイデア・創意工夫だけに拠るものではなく、どちらかというメタデータの入力規則を覚え

る、コンピュータシステムに習熟するなどの単純作業が多い。資料を電子化して機関リポジトリに掲載するための著作権処理など、単純に規則に従って実施しなければならない、文字通りの”単純作業”が必須のものとして多く含まれている。しかしそれにもかかわらず機関リポジトリの事業には、今までの大学図書館が実施してきた他の事業がもっていない、図書館員を元気にする要素が含まれているのである。それは機関リポジトリの事業を遂行するためには、学内の教員と直接的な相対したコミュニケーションをもたざるを得ないことである。単にコンテンツを収集するだけでもその作者である教員の許諾が必要であり、教授会や研究室に出かけて行って事業の意義を説明する必要がある。そしてその場では何故その教員の専門とする学術の分野において、既存の学術コミュニケーションのルートとは別に機関リポジトリに掲載し世に無料で公開しなければならないのかを明らかにしなければならないであろう。そのためにはその分野における学術情報の流通が現在どのようになっており、何が改善されるべき問題であるかを知っており、機関リポジトリに掲載し無料公開することによってそれがどのように決着をみるのか、或いはそのよい決着をみるためにどのように貢献するのかを示さなければならない。従って、図書館員はその行動範囲を図書館外に広げなければならない且つその考える範囲を図書館外どころではなく大学外、そしてこの国の外にまで及ぼさなければならない。そしてこの、特定の分野に限定されない「学術情報の流通」が大学等研究機関において正に図書館員のみが担当し得る分野であることを考えるとき、機関リポジトリの事業が図書館員を図書館員が考察

するに相応しいテーマの前に連れ出して来ると言えるのである。図書館の外に出て行かなければ実施できない（機関全体の事業ではあるが）図書館が担当する事業。貝のように図書館の中に閉じこもって仕事しているのが大好きな図書館員が、わざわざ研究室まで出かけて行ってその道のプロである研究者に「あなたの専門分野の未来はこのままでよいのですか」と失敬千万な問いかけをしないと進めていくことができない事業。本質的に図書館の外とする事業。これが他の業務と機関リポジトリの業務が決定的に異なる点である。機関リポジトリの事業は、図書館員が元気になるければ決して維持していくことができない事業なのである。私はそこに、学術情報のOpen Access 化を目指す機関リポジトリの、もう一つの大きな価値を見出すのである。現実の大学図書館では予算縮減とアウトソーシングの進行により、サービスの改善を考える余裕がなく、更に進んでは専任の職員も配置できないといった事態も耳にする。その責任の所在はまた別に考察するとしても、機関リポジトリの事業がもつこの消息を図書館員が経験し、大学等研究機関の中で自分達が果たすべき、自分達図書館員しか果たせない分野のサービスを始めることを心から願う。小さな職場（別に大きくてもよいが）で、しかし毎日かなり忙しく窓口対応から受入資料の選定まで業務をこなしている図書館員が機関リポジトリの意義を知り、自分の機関の研究者が、自分の図書館室が、そして自分自身が現在の学術情報の流通に大いに影響されていると実感し、機関リポジトリによって自分ができることを見出し、そしてそこで働く意義をはっきり感じて毎日の業務に向かうことができるようになる、と想像する。それは私に小

躍りしたくなるような喜びをもたらす。この世も捨てたものではないとさえ感じる。必ずそれは私だけではなく、多くの図書館員に伝染するものと、信じる。

Ⅲ. 終わりに

私は元来単に本が好きで図書館に奉職した者で、それ以外の目的は一切仕事にはもっていなかった。時々この類の告白をする図書館員に出会うが、それは毎回私にとって結構嬉しい出会いである。ところが奉職後直ぐに大学では学内 LAN が整備され、telnet で海外の大学の OPAC を検索する時代が来た。本好きはコンピュータを学ばなければならな

くなり、やがてそれにハマった。しかし大きな大学の図書館に居て、担当は常に細かく縦割りに区分され、図書館業務全体を一望して自分なりの判断を下すという機会には遭遇できなかった。そこに機関リポジトリの事業がやってきて、私は初めて大学図書館の仕事の面白さ、大学図書館職員としての楽しさを知ることができた。私のケースが特殊なのか不幸にして結構多い事例に該当するのか知らないが、この機関リポジトリの事業がより多くの機関で実施される、それもその機関の図書館員を元気にしながら進展していくために、今後も努力していきたいと感謝しつつ、願っている。